

■句集■

遠くの山 中原幸子

富士見書房

水

仙

水仙ののぞく手提げを膝の上

茶の花や祖母のてのひら温かりき

三輪車昇がれてゆく初時雨

足もげし蟹の文鎮冬に入る

寒晴れの誰も気付かぬ誕生日

そこそこと指で指されてマスク買う

あるだけの靴玄関に十二月

ごみ箱へシユート決まる日日脚伸ぶ

弟は母の妙薬今朝の春

茶碗洗う耳にいきなり春の雷

紅梅を覚えてますかあのときの

春浅し一階上の遠景色

春一番鼻の頭にパツクして

会議室わらび餅売る声通る

廻し取りしてたちまちに花菜漬

春愁の音なく割れるグラスかな

うららかや風信帖を父と見る

米寿ほぎし日の祖父の笑み春灯

瀬の音の他にはなにも竹の秋

狸々の額吹かざる薪能

春眠の瞼にたまご抱くような

つなぎ合う手の見え隠れ春シヨール

春の風ビル一面にビル映る

そら豆の香の香料の納品書

ペケ描いてマル描いて拭く春埃

短夜や胸に伏せたる今月号

み吉野の緑の底の赤瓦

白蝶のわがまま気まま始発駅

雷や紅茶底まで透きとおる

曲がるたび曲がるたび藤高野まで

黴の香やあと一章のサスペンス

どの店もまだ開かざる緑雨かな

軍馬ひく叔父の遺影や柿若葉

あめんぼう何もしてない後ろ足

白南風の地図に加わる駅ひとつ

青
ト
マ
ト
久
太
郎
町
一
丁
目

夏
至
暮
る
る
三
度
食
事
を
し
た
る
の
み

浜
木
綿
や
荷
物
重
し
と
思
う
日
の

地
下
鉄
の
3
号
出
口
蔦
若
葉

都
合
に
よ
り
休
む
ス
ナ
ツ
ク
花
ざ
く
る

好ききらい好き好ききらい夏に編む

乗り過ごし川西池田桐が咲く

夏の蝶市内一斉大掃除

キヨスクの今日発売の葛桜

秋灯の富士正晴の居室かな

八月や遠くの山の名前聞く

赤咲くと思いおりしを黄のカンナ

走る雲とどまる雲や八重木槿

ようおこし栗ご飯いま炊けたとこ

消しゴムへ帰る九月の半ばには

天高し壁にワニ飛ぶ博物館

青蜜柑アンモナイトをなでし手の

通りゃんせ昼のこおろぎ四拍子

木の実独楽その場に軸を定めけり

二百十日赤い階段上り下り

秋の薔薇私ただいま空っぽです

秋の庭ダックスフンドのたのたと

杉苗のまばらに立ちて秋時雨

ビタミン錠おはじきにして神の留守

五円玉拡大鏡で見る冬至

耳底に地底の圧や冬の旅

白菜の尻つやつやと売られけり

みんなみんな聞いてほしがる霜夜かな

八分音符

菜の花の空とぶ八分音符かな

遠い遠い遠い悲しみ犬ふぐり

足ふんで踏まれて春のおじぎかな

如月のまあ紀ノ川の色かいの

名水を一人が提げて梅日和

落の臺首のすわらぬ嬰抱いて

急ぐでもなし福耳に春の風

春一番売られたけんか買った仲

でで虫や腕枕して父眠る

新じゃがのふたところより届きけり

柿の花大きな岩へ嘘つきに

旧街道旧旧街道百日紅

少年のかかと歩きの立夏かな

緑雨中うつのみやささんうじゃうじゃと

若葉風背中見ていていいですか

熊 蝉 や 毎 日 変 わ る 仮 歩 道

で は 失 礼 、 背 に 油 蝉 と め て い る

よ う 冷 え た 釣 銭 出 た り 雲 の 峰

鞍 馬 山 つ の 立 て て ゆ く 蛞 蝓

耳 た ぶ の う す も も 色 や 氷 水

沈んでるまま昼となる水中花

心太いさかいの種なんだっけ

打ち水やうしろ姿の舞妓の絵

真四角にメモたたまれて夜の秋

がまがえる磁石は北と南指す

雲合いや玉蜀黍のひげ伸びる

何もないとこでつまずく猫じゃらし

目の中の瞳取り出す白露かな

ゆっくりと列車とまって野紺菊

人面の石コスモスの風の中

まっすぐに歩く七条萩の花

鼻の日や新聞丸く切り抜いて

あの家は十ばかりなる吊るし柿

大根干す宅急便も受け付ける

栗餅の栗すけて見え日曜日

梨十五来て手のひらにのる一個

山茶花が散る日の国の土の色

つららきらら年中無休の六腑かな

大寒や黒のボタンに灯が映る

風花やマルセイユより吉草油

出かけよう本の袋に蜜柑入れ

腸が胃につながる不思議寒の月

寒見舞紫蘇飴黒飴抹茶飴

釜めしがまだ乗ってない寒のバス

ちよつとずつ割り込むお尻十二月

春
の
土

細胞に窓ひとつずつなすな咲く

ぷるぷると傘の水切る西行忌

水抱いて馬酔木の眠る二月堂

がにまたの男のあとを春の雪

春愁や名画の中の目が百個

はしっこが好きで蛙の目借り時

菜種梅雨ピアノニツシモな男たち

外は雨ですわたしは壺のヒヤシンス

集金のふたことみこと夕霞

春の雪止んで月齢三ぐらい

赤ちゃんの足と握手を春の昼

剣豪伝硝子の向こう牡丹雪

菜の花は中洲いっぱい日は朝

花吹雪駅の鉄骨立ち上る

見下ろせば人みな黒し春の宵

桜咲くそうだヤカンを買いに行こ

皆おりる私もおりる春の土

脚出して飛行機の着く春の土

風光るほんとうのこと言いそうに

かたばみの実のみどりなる城址かな

花
い
ば
ら
束
子
工
場
北
向
き
に

道
端
の
本
の
貸
し
借
り
樟
若
葉

胎
内
の
よ
う
に
薄
闇
え
ご
の
花

夏
来
る
笑
顔
一
発
見
舞
わ
れ
て

花
は
花
だ
け
の
か
た
ま
り
百
日
紅

レシート
の裏で
掛け算
走り梅雨

夏みかん
胸に小川
がありますか

息とめて
蛍の息を
見ておりぬ

合歡の花
石の産地
を通りけり

白南風
や醤油の
町を団体で

バラ咲かすついで
の風に吹かれおり

天井へ届く箆笥も
土用かな

すべりひゆ銅座の
あとを通りけり

わいわいとアイス
クリーム妥協せず

寝てる間に着いて
お昼の穴子飯

本連寺蟻ふみそうに歩きけり

赤道をとびこえて来て素足かな

トワイライトコンサート木のベンチのギュツ

帆の影のちょうど足りてる二人かな

石抱いて真夏は絵本読む季節

弟が来て刈りゆきぬ草いきれ

六分の一の西瓜を買いなれて

鳥が二羽とんぼが二匹雲流る

櫛紅葉ゆれて新築分譲中

菊の香や百済観音パリへ発つ

お茶の味より始まりぬ母の秋

栗ごはん飛行機とんで雲とんで

花の名はリュウデンドロン明日子規忌

満月の真夜中母はおしっこに

重陽やおまけにもらう世界地図

冬の虹皆打ち明ける五十肩

リーボック履いて女の鬼貫忌

大根を炊いて寝かして京都まで

お茶漬や海に居座る冬台風

何語かなでも寒いねと言っている

ガスの火の青く澄みつつ大根炊く

黄水仙そういうことに揺れないで

マスクして殺人事件読了す

ブローチは黄色みみずく冬に入る

一山の真冬のみどり納骨す

電話魔の繰り出すパンチ日脚伸ば

数え日やテレビに脳の輪切りなど

かゆいところかいてもらっている二日

折り目ある旗に日のさす二日かな

赤ちゃんとバスで知り合うお正月

冬
帽
子

立春のグラスは水を盛り上げて

恋ひとつふたつと数え梅の花

三十五年もののロッカー春暮るる

春暁の俳句は薬ぽあんぽあん

亀の上に亀のつており春日傘

一瞬の私
が好かれ
春の風

牡丹雪顔
二つある
肖像画

頁一杯
看護婦
試験合格者

どんと来て
罰かもしれぬ
春のキス

新顔へ
高層ビル
の春嵐

二階まで螺旋階段四月馬鹿

石 罅もタオルも眠り春の月

母の日や屋根に見知らぬ草ぼつり

でで虫の角伸びきって青天井

卯の花の濡れて散るとき透きとおる

駅々 はみんな 当駅 若葉風

ダライラマ頭とんがる 立夏かな

とんがって歩く ナカハラ 晩夏光

花つけて名札なき木も 緑雨中

合歓の花理学部 附属植物園

朝起きることのしあわせ花胡瓜

目に青葉小物一匹釣りあげて

梅雨続くトイレの壁の助詞リスト

三分で行って戻りぬ柿若葉

駅前町四番を発つ晩夏かな

雲の影過ぎて吹かれる金鳳花

夏山の置いたリュックに合うピント

岩へ消ゆ雷鳥の背のなだらかに

岩桔梗ひとりちようどの道の巾

山小屋の声筒抜けに夏終る

這う虫と思えば飛びぬパリー祭

ひとつずつ紅き曼荼羅青梅に

魚食べまた魚食べ半袖で

飛び込めば即安楽死白牡丹

素手素足マウスの血圧わたしほど

花火浴びキリスト教徒仏教徒

きしむ椅子きしませてみる青田風

桜蕊ふるふるふれふれ街あかり

大桐に花の現役感をみる

もいっぺん振り向くやるか木下闇

十五夜のそうかもそうでもない私

み仏の丈十センチ秋の空

嘘ひとつからたちの実は上向きに

秋の風指で作った丸抜けて

ほがらかを道に散らして柿紅葉

火を弱め待っているとき吾亦紅

エトセトラ朝露の道まっさらに

秋立ちぬピリオドが生むはじまりも

赤とんぼ光源定期点検中

廊下
去るオニヤンマさま
経続く

じゅげむじゅげむ残暑見舞が二通ほど

台風一過すしもうどんも蠟細工

立秋や研ぎに研いだる鉄の味

秋夕焼ホテルはパンを売るところ

水澄んでノーと返してほしい問い

ほやほやの悲しみである冬帽子

ピカソ見に行かねばならぬ寒さかな

ラブとブラ似ているようで冬日和

ニクロム線徐々に火の色十二月

エンピツは夜中に歩く十二月

夕映えの風は消しゴム十二月

雪うさぎ日曜ひとつ買えたらな

暖房器弱でためして母といる

暮のまち実印ゴム印認印

愛なんか風花の夜はココアだよ

叱られて
いるも
ララ
バイ
冬の
雷

霜月
をエ
ース
のい
ない
チ
ーム
勝
つ

雪と
雪ふ
れあ
うこ
とも
あり
まし
た

とん
汁が
いい
ない
つも
の歩
道橋

略歴

中原 幸子（なかはら さちこ）

1938年1月3日、和歌山県生

1994年「船団の会」入会

跋 194
cm
*
130
cm
坪内稔典

定 価 二八〇〇円（税別）
発行所 富士見書房
発行者 青木誠一郎
著者 中原幸子

句集 遠くとおの山やま
平成十二年九月二十五日 発行